西 欧 の 他 者

―― ユダヤ人 Shylock とムーア人 Othello ――

大 上 治 子

はじめに ―― オリエンタリズム

> The Orient is not only adjacent to Europe ; it is also the place of Europe's greatest and richest and oldest colonies, the source of its civilizations and languages, its cultural contestant, and one of its deepest and most recurring images of the Other. In addition, the Orient has helped to define Europe (or the West) as its contrasting image, idea, personality, experience. Yet none of this Orient is merely imaginative. The Orient is an integral part of European *material* civilization and culture.
>
> E. Said, *Orientalism*, pp. 1-2.

隣接しているが故に豊かな文明を持ったオリエントは，西欧に文明の礎を与えた後，強力な敵，他者として差異化され，負のイメージを押しつけられ排除されていった。このオリエントとは特にイスラムとユダヤの世界である。西欧はこの2つの世界から豊かな文明を吸収して，12世紀にキリスト教国と自らを規定して自己形成する時，他者として，自分と反対の闇の世界として排斥し始めた。

元々，この三大宗教そのものが周知のように，隣接し共通した基盤から分かれていき，差異化することで自己を規定していった面がある。唯一神を持ち，神が人間に啓示した言葉を出発点とし，それを伝えたのがアブラハム，モーゼ，イエス・キリスト，ムハマンドと具体的な人物である。イスラム教においては，先行する預言者は皆自らの宗教の中に生きており，三宗教を合わせて啓示の民・啓典の民として他の宗教と区別しており包容力がある。しかし，キリスト教はユダヤ教から生まれる時，自らを「非ユダヤ教」として規定し，後の迫害のもとが成立そのものの中に認められる。

S. グリーンブラットによると，西欧人にとっての自己成型は「異質なもの，奇異なもの，敵意あるものと認識されたものとの関係において達成される。この脅威的な他者－異端者，野蛮人……反キリストーは，攻撃され破壊されるために，発見され，あるいは創作されねばならぬ。……その結果達成されたアイデンティティは自らのうちに自らの顚倒ないしは喪失の兆候を孕んでいる。」差異化がこのように行なわれる時，文明は破壊的不毛なものになる。

前回述べたように，この西欧の自己形成の根幹にある他者との関係が，ヴェニス共和国という12-15世紀繁栄をきわめた近代国家の雛型に集約されている。そして，そこを舞台にしたキリスト教徒ヴェニス人と，ユダヤ人シャイロック，ムーア人オセローとの関わりに，その関係を劇的に鮮明に見ることができる。今回は，オリエント人であるユダヤ人とムーア人を，他者として差別し排除することで西欧人が自己形成する過程を，作品と歴史から検討し，合わせてそのオリエンタリズムを越える共存の可能性を歴史を中心に探っていきたい。

I. ユダヤ人 Shylock とムーア人 Othello

まず，キリスト教国ヴェニスにとっての異人シャイロックとオセローの共通点は，2人とも大変な実力者であること、それも国家存立の基盤となる分野，経済と軍事において重要な地位を占めていることである。

シャイロックは，ヴェニスきっての大商人ア

ントーニオが自らの信用で金を借り，堂々と張り合うほどの金融業者である。その資金で彼の無二の親友バッサーニオは，ポーシャへの求婚というギリシャ神話の“Golden Fleece”の探求やヘラクレスの偉業になぞられる大事業を成し遂げ大金持になる。この資金なくしてアントーニオは友情を示すこともできず，バッサーニオは借金だらけの放蕩児にすぎない。ポーシャはため息をついて，空しい箱遊びによる婿さがしを続けなければならず，すべてを動かす原動力となったのがシャイロックの金貸しとしての実力なのである。嵐によって無一文になるかもしれない不安定な大商人アントーニオと比べても，彼は唯一の確かな力を持っている人物である。

オセローは，ヴェニスのみならず西欧諸国にとっての最大の外的脅威，トルコ軍と闘える唯一人の将軍である。対トルコとのキプロス戦争で，国としては何事があってもオセローをクビにできないことをイアーゴーは“Another of his fathom they have none / To lead their business”(1-1, 152-3) と最大の実力者であることを認める。緊急事態で元老院より真夜中手をつくして捜索されるほど信頼されている。実際は嵐によってトルコ軍は自滅し，闘わずして勝利を得るのであるが，とにかく異教徒を打ち破り，西欧の壁としての役割を見事に果たした雄壮なキリスト教徒として，勝利の武勲劇を展開させる力を持っている。しかも元老院議員ブラバンショーの愛娘デズデモーナをも恋の虜として父を捨てて結婚に走らせるほどの魅力を持ち，文字通りの英雄である。

そして，もう1つの2人の共通点は，皆が恩を受けているのに，異教徒，異民族であるが故に悪魔呼ばわりをされ，巧妙なトリックで破滅させられ，財産などをすべて没収されることである。シャイロックの場合は公然と外的な力によって，オセローの場合は個人的に，いわばリンチのようにして内部から破滅されられる，という違いはあるが。

シャイロックは「卑しい高利貸しのユダヤ人」として公然と罵られる。アントーニオもバッサーニオも彼のことを悪魔と何度も言い，唾を吐きかけ「人食い犬」と呼び，ゴボーは「悪魔の家」から逃亡する。そして裁判は証文に基づく正当なものであったはずだが，ポーシャの巧妙な法の解釈によって逆に殺人罪に問われる。残酷な異教徒による高潔なキリスト教徒殺しの容疑，そして強制改宗の命令と財産没収という精神的，社会的死を宣告される。このポーシャの解釈が詭弁に近いものであることはT. イーグルトンらが指摘しているし，裁判そのものが身内のみで固められたものであることなど，前回に述べた通りである。

オセローはムーア人ではあるが，立派なキリスト教徒としてヴェニスの貴族たちからも尊敬されている。しかし，冷徹な現実家で不満な野心家のイアーゴーは始めから私的会話で「黒い悪魔」「黒い羊」「アフリカの馬」と貶める。元老院議員のブラバンショーも，私的レベルでは，娘がオセローに心を奪われたのは，怪しげな「魔術使い」，「悪魔の企み」であると言って結婚に猛反対する。この公的レベルと私的レベルの差－公的には立派な身分の人に対してシャイロックのようにはできないので，巧妙に内部に入りこんで破滅が仕組まれていく。言葉を操り，偽りの状況を作り，頭の中に妄想の怪獣を孕ませ，拷問のような嫉妬の苦悶と激情の炎で自らの精神を焼き尽くし，殺人を犯させ自ら果てさせる。いわば内なる異教徒性を引き出させられる，もしくは押しつけられるのである。それはイアーゴーが自分の精神を投影させて創られたものなのだ。オセローがあくまでもヴェニス国家に対して忠実なキリスト教徒であることは，すべてが明かるみに出て，冷静な自分に戻った時，自らの犯した罪を自身で罰する次のせりふからわかる。“……in Aleppo once, /Where a malignant and a turban'd Turk /Beat a Venetian and traduc'd the state, /I took by th'throat the circumcised dog. /And smote him-thus.”(5-2, 360-363) ヴェニス人にとっての敵のトルコ人を殺すように自らの刀で果てる。イアーゴーによって引き出された異教徒を自らの手で殺すのである。トルコ艦隊が嵐で自

滅するように，オセローが自らの激情の嵐で自滅するのは，ヴェニスにとってある意味で幸いなことである。実力者であるが故に危険な存在，キリスト教徒ではあるが異邦人のムーア人の危険性。最後にオセローを "great of heart" と称揚するのは異国フローレンス人のキャシオーであり，ヴェニス人ロドヴィーコーの台詞は "Gratiano, keep the house, /And seize upon the fortunes of the Moor, /For they succeed on you." (5-2, 373-375) ムーア人の財産没収である。

ちなみに，イアーゴーの近代合理精神は貨幣と深いつながりを持つ。彼はロドリーゴーの欲望を刺激しながら "put money in thy purse" を繰り返し，「自分は自分の主人である」と言い，自らの野心のみで行動する。自己投影させた嫉妬を「自ら孕んで生まれる化け物」と言うが，それは欲望のため自己増殖する貨幣にもあてはまる言葉である。オセローの中で自己の精神を増殖させようとし，内部より食い殺していく。ここに虚飾をはぎとったヴェニス人の赤裸々な一面が表われている。

シャイロックも受難であるが，彼はユダヤ教徒として誇りを持ち，敗れてもおそらく面従背腹のマラーノとしてしぶとく生きていくであろう。しかしオセローは，どんなに完璧で立派なキリスト教徒になってもムーア人であるが故に異教性を押しつけられ内面から破滅する，ということで救いようがない。

社会において重要な役割を担う実力者の異人，「脅威的他者」を自分と違う他者，悪魔として巧妙に外的内的トリックで破滅させ，財産を没収する。そのことによって物質的に多大な利益がもたらされたが，ヴェニス人はどんなアイデンティティを得たのであろうか。

シャイロックの「ケチな守銭奴」「正義にこだわる固い心」「復讐心をもつ人殺しの残忍さ」に対してはヴェニスの若者の「お金に執着しない寛大な心」「慈悲で許す柔らかい心」「陽気な友情に篤い仲間」「結婚と新しい生命」。しかしこれは明らかにヴェニスの若者の視点でとらえられ，彼らとユダヤ人の関わりから生まれたものである。遊び好き浪費家の若者が，遊びから締め出されお金の使い道もなく唯一の生計の道である金貸し業に勤しむ人に言うのは「ケチな守銭奴」。鍵をしっかりかけなかったらロレンゾーたちに盗まれて湯水のごとく使われてしまった。金貸し業の仕事に勤しむと邪魔をされ悪態をつかれ唾を吐きかけられるし、その上民族を蔑まれれば，「敵意，復讐心」を持ち「固い心」になるだろう。唯一の味方である「法」に訴えると慈悲で取り消すよう言われ，拒否すると揚げ足をとられ強制改宗と財産没収をされる。慈悲があったらお金を返却し，改宗の強制などしないのではなかろうか。彼らも厳しい法を相手に適用する「固い心」を持ち，実質的「人殺し」でもある。お互いが合わせ鏡のようになっている。そして，ヴェニス人は勝利を収めるが，国の拠って立つ法の正義が曲げられ，経済的基盤である金融業者をその精神もろとも追放してしまうと，自分たちの良きアイデンティティそのものの存立も危いものになってしまうのではなかろうか。

Othello においてはこのことがさらに明白である。「理性と意志の力で自分が自分の主人となり，本能も他人も自分に従わせる」現実的合理的なイアーゴーの自己イメージに対し，オセローは彼に言わせると「淫らで」「信じやすくだまされやすい」。そして「情念に溺れ」させられ殺人を犯す。始め寛大で理性的で勇敢で非の打ちどころのなかった立派な軍人のオセローの変化は明らかにイアーゴーが意志的操作によって自分の負の面，自らの淫らさ，嫉妬心を押しつけたのであり，自分の姿をオセローに映して見ていたのである。彼の企ては最後に露見して自らの破滅をもたらし，オセロー亡き後，強大なトルコの脅威は残り，ヴェニス国家の存続も危うい。

このように，敵として負の面を押しつけた他者は，確実に自分の1部となっており，排斥することで自分のアイデンティティも喪失の兆候を孕んでいるのである。シャイロックもオセローもステレオタイプ的に描かれていると言われるが，その分，西欧の異教徒との関わりの歴

史を生々しくリアルに見せてくれる。

II. ユダヤ人の差別と排除

ユダヤ人の西欧文明への貢献は「貨幣」と「知性」であると言われるが，特にシャイロックに表わされた特性，「高利貸し」「殺人」「異端審問」(裁判）の観点からユダヤ人の歴史を見たい。

A. 高利貸し：彼らは資本主義経済，貨幣経済の担い手として強大な力を持つのであるが，彼らのお金へのセンスは昔から養われてきた。古代ローマ時代から地中海商業の担い手として活躍しており，エルサレムを目ざす巡礼者たちが神殿税をはじめ多くのお金を落とし想像を絶するほどのお金が渦巻いていた。また，市民生活で冷遇されていたためキリスト教徒のようにお金を使うチャンスが少なく，奢侈禁止令も適応され，倹約の精神が育成されていった。金儲けの才能，貨幣経済への際だったセンスから，担保や利子を取って商売として貸し付け，自らは働かずとも巨大な富を蓄積していった。聖書でヤハヴェはユダヤ人に「主であるあなたの神は約束通りあなたを祝福するであろう。すると，あなたは諸国民に貸すが，誰からも借りることはないであろう」と約束し，タルムードは金貸しについての見事な教科書になっているという。キリスト教徒の金貸しには利子の徴収が聖書によって禁止されていたが，ユダヤ人の場合，特に異邦人にお金を貸すことは手柄だと考えられたことも拍車をかけた。

ユダヤ人は1世紀，ローマ帝国に征服されてから流浪の民となりディアスポラ(世界離散)が始まった。大きく東ヨーロッパ，トルコ，イベリア半島へ散って行った。特にイベリア半島はローマ法の掟のもとに市民権を与えられて自由に働け，信仰も自由だったため，多くのユダヤ人が移住した。4-6世紀，キリスト教国となったビザンチン帝国に迫害されたが，7-11世紀はイスラム世界により庇護され共存共栄した。7世紀にヴェニスで交易を復興させ，9世紀トルコ帝国では国際的商人として有名になり，スペインから中国に至る陸と海の商業ルートを確立した。イベリア半島では領土的な野心を持たない聖書の民ということでムーア人に受容された。宮廷人としての最上層部，商業金融業に従事するかなり裕福な中間層から都市周辺のあらゆる業種に携わる下層階級まで多様をきわめたが，安定した状態を保ち続けた。1300年頃，全ヨーロッパのユダヤ人の4割の19万人がイベリア半島に住んでいた。

7-11世紀には，新興ゲルマン国家のドイツ，フランス，イギリスをも助けた。この頃は，他の外国人とあまり格差のない待遇を享受し，職業的にも幅広く従事し，イスラム世界との重要な外交交渉においても活躍した。特に重要な役割が西欧と東方世界とを結ぶ地中海経由の遠隔貿易においてであった。しかしその後，11, 12世紀を転期に北イタリア諸都市が台頭し，地中海貿易の覇権をイタリア商人が掌握すると，遠隔地貿易で蓄積した資金を持って消費者金融業の分野へ転進した。有利にしたのが，ローマ教会によるキリスト教徒に対する利息つき貸付けの禁止令であった。自分達は教会法の権限の外にあると主張して金融業の中心勢力となった。11-13世紀には国王により保護搾取され，組織的に組みこまれた。つまり，お城の近くに住み，高い税を納めて国王財政に多大な貢献を果たした。彼らは余暇をふんだんに持っていたので学問研究に時を費し，兼業として医師をする者も多かった。当時最高水準のアラビア医学の文献がスペインのユダヤ人を通してヘブライ語に翻訳されていたので最新の医術をものにすることができた。彼らは貨幣という抽象的なものを扱っていたために抽象能力，知性にすぐれていたのである。一般の商工業を支配していたギルドがユダヤ人の加入を認めず，商工業の諸分野から厳しく排斥したことが金融業に集中した1つの原因となった。

12世紀頃から迫害が始まった。特権を持って貨幣を蓄積し活躍するユダヤ人に対しての嫉み，自分たちの生活が脅かされる不安から民衆が敵対感情を持ち，しばしば暴動が起きた。正しくないと知りながら同じ金勘定をしている自

己の罪意識をユダヤ人に投影させた，とも言われる。また，西欧諸国では農業技術が進んで開墾地がふえ土地不足になり，商業金融業においてもイスラム人ユダヤ人を通して実力を身につけてくると異教徒を追い出し領土拡張運動を起こし，十字軍やレコンキスタが始まったのである。教会はユダヤ人への抑圧を強めていき，1179年の第3ラテラノ会議で反ユダヤ的諸規定が教会法の中に制度化し，1215年の第4ラテラノ会議では「ユダヤ人徽章の着用義務化」と「すべての公職あるいは類似の権威の外観を与える地位からユダヤ人を排除すること」の規定が採択された。徽章によってユダヤ人をキリスト教徒から識別させて社会的接触を阻止し，社会的に排斥しようとする差別的意図のもとに制定され，その色は始め白であったが後に「危険な好ましくない色」黄色に変えられた。これはユダヤ人賤視が組織化され，否定的イメージを確立する上で大きい力を及ぼした。イギリスではテンプル騎士団やイタリア銀行家が力を増すと，ユダヤ人の金融業が禁止され，1290年には国外の永久追放令が出された。

このように，ユダヤ人はすぐれた金融業者として社会の基盤たる経済を握り，その上に学問，貿易，外交などで手腕を発揮し，キリスト教社会を脅かす存在となった。それ故逆に憎まれ，追放，虐殺などが行なわれるようになった。経済的対立は人種的憎悪となり，それは道徳的対立へとすり替えられ，憎しみをこめて相手に道徳的劣等者の烙印を押しつけ，悪魔呼ばわりをして見下そうとするのである。

B. 殺人者：「高利貸し」の次にユダヤ人につきまとうのが「殺人者」のイメージである。まず，キリスト教の中には，ユダヤ人は「神殺しの民」であり，「イエス殺害」の責任を子々孫々に至るまで負うべきである，という考えがヨハネ伝福音書19章に内包されている。

迫害の始まった12世紀頃から儀式殺人告発が多発し，「悪魔としてのユダヤ人」のイメージが繰り返し強調された。それは，ユダヤ人がキリスト受難を冒瀆する儀式を行うために，キリスト教徒の幼子を誘拐し，磔刑にして殺害するといういわれなき虚偽の告発であった。それは1144年，イギリスのノリッジで最初に発生した後，西欧全体に飛火していった。大陸諸国では告発の虚偽性を確認宣言しているが，子供の変死体＝ユダヤ人の儀式殺人という紋切り型思考パターンが植えつけられ，致命的悪影響を両者の関係に及ぼすことになった。ノリッジでの事件は修道院と聖遺物崇拝に関わっていたらしい。異教徒に殺された者は聖者に祭り上げられ，その聖遺物が巡礼の吸収力となって参詣者が群がり，寄進などによって栄えたという。ユダヤ人金融に負う多額の債務を帳消しにするために行ったこともあったらしい。James Shapiro 著 *Shakespeare and the Jews* にもこのことが詳しく述べられている。多額の債務を負って，逆に殺人罪で告発し，負債帳消し，財産没収というのはシャイロックのケースと同じである。殺人者のイメージは自分自身の意識下の化体説への疑いをユダヤ人に投影させ，ユダヤ人が爪を聖体につき立て聖体が血を流しているイメージを作り上げた，という説もある。

14世紀にペストが流行ると「ユダヤ人が井戸に毒を投げこんだ」とその元凶がユダヤ人に求められ，強く弾圧されるようになった。実際は，ユダヤ人が戒律を守って清潔で知的な生活を送っていて死亡率が低かったためである。そして1391年，セビリアでのポグロム（大量虐殺）がカタルーニャ，アラゴンを始め拡大していった。

C. 異端審問：シャイロックの裁判は「異端審問」とも解釈される。異端審問所は1480年スペインのセビリアに設置され，最初の裁判が1481年に行なわれた。設置までに，1391年セビリアでの4千人のポグロムが拡がり，生命や財産を守るためにやむをえず改宗せざるをえない状況に追いこまれる。そこで初めてコンベルソとマラーノという改宗者集団が生まれた。コンベルソは改宗した後に心からキリスト教に帰依しているユダヤ人，マラーノは生命や財産を守るために表面的に改宗したため面従腹背，秘かにユ

ダヤ教を守り抜いている隠れユダヤ教徒を言う。マラーノとはユダヤ教徒の食べない「豚」のことで，彼らの隠された信仰への呪いと，改宗者の目ざましい社会的進出に対する嫉妬から呼ばれるようになった。このマラーノが瀆心的な儀式を行い，国家と教会を脅かす，という修道会側からの進言と，改宗者から漠大な財産を没収できるという女王の期待のもとで異端審問所が設立されたのである。1人でも多くの被告を必要として密告が奨励されたという。没収された財産は，イスラム教徒との闘いの戦費や，後に新航路発見，植民地事業のために使われた。

1492年，ムーア人最後の拠点グラナダが陥落すると「カトリック信仰による宗教統一」成就のため，ユダヤ教徒追放令が出された。ユダヤ人の多くはポルトガルへ逃れたが，そこでも1497年追放令が実施されたため，新たに5万人が改宗し，残り16万5千人は国外脱出の道を選んだ。トルコ帝国，北イタリア特にヴェニス，ネーデルランドのアントワープ，イギリス，南フランス，北アフリカ，南北アメリカ，西インド諸島であった。彼らは国際的ネットワークを作り，後に植民地事業などで大活躍し，さらに資本主義を発展させていく。

ヴェニスは中世にイスラム人とユダヤ人から多くを学んで地中海貿易を発展させたため，ユダヤ人に対して寛容で最も安全な国であった。そのために多くのユダヤ人が流入した。しかし1492年のイベリア追放で大量に流入して様々な問題が生じたため，1516年，限定された土地にユダヤ人7千人を住まわせ，世界初の「ゲットー」が生まれた。周囲に高い壁をめぐらし門を設け，昼間は自由に出入りできたが，夜間とキリスト教祭日には門を閉ざし厳重に隔離された。しかし隔離により敵の侵入を防ぐのに有効だったばかりでなく，民族的な団結と文化を強力に保存する役割を果たした。土地所有を禁じられ，公的な仕事から締め出されていたユダヤ人は，不浄な行為と見なされた金貸し業に専念するしかなくそこで活躍し，“Shylock, a rich Jew”として舞台に登場するのである。

イギリスでも1290年に追放令が出されていたが，対スペイン政策の一環としてユダヤ人の暗黙の再入国が認められ，マラーノが共同体の形で見られた。約百人ほどおり，主に外国貿易と医師として活躍するポルトガル系と，ヴェニス出身で音楽演奏と楽器製造に携わるイタリア系で，両者ともルネッサンスの華を咲かせる上で大いに貢献した。エリザベス女王は，1571年に金貸し業は誰にでも許されるという条令を発したり，親ユダヤであることを示すため，オランダへ向かう途中捕えられてロンドンへ連れてこられたマリア・マネスの美貌と謙虚さに魅せられ，御車に乗せて一緒に市内を巡幸したとも言われる。

この頃活躍したマラーノとしてディオゴ・メンデス，ジョアン・ミゲス，アルヴァロ・メンデスなどがいる。ジョアン・ミゲス(1524-1579)はメンデス一族のアントワープの大貿易商会を継ぎ，ドイツの貴族に列せられたが，ヴェニスからコンスタンチノープルへ行き，公然とユダヤ教に改宗してヨゼフ・ナシィと称し，トルコの宮廷で高位に昇り，華々しい外交を展開した。1570年，ヴェニスに宣戦布告してキプロス島の攻略に成功したが，翌年レパントの海戦で敗れた。彼はシャイロック像の創造に役立ったとも言われるが，キプロスをめぐるトルコとヴェネチアとの闘いの英雄ということでオセローとも関わっているように思われる。

アルヴァロ・メンデスはインドでダイヤモンドで財をなし，サンチアゴの騎士，ポルトガルの貴族，イギリス女王の侍従，トルコ帝国のサルタンの侍従長となり，マラーノのネットワークの統率者であった。このアルヴァロ・メンデスの義兄が，かの *The Merchant of Venice* が書かれるきっかけとなった事件の中心人物ロデリーゴ・ロペス（1525-94）である。

ロペスはポルトガル系医師で，ロンドンで改宗し，レスター伯の医師，女王の侍医となった。彼の家はレスター伯，ウォルシンガム，エセックス伯，オーキンズ，ドレイクなどが集まり，対スペイン戦争支持派の司令部となっていた。トルコと組んでスペイン打倒を謀る王室にとって，トルコ高官と結びついているロペスは貴重

な存在であった。しかし，スペインと組んで女王暗殺を企てたという嫌疑をかけられ，民衆のユダヤ人への反感もあり，真相不明のまま処刑された。このように，ユダヤ人は異端裁判にかけられ，財産を没収され追放されるが，逃げのびた地で活躍し，その地の発展に貢献していくのである。逆に，追放令を出した地では人材を失い，後の経済戦争に敗れていった。

III. ムーア人との関わり――オリエンタリズムを越えて

西欧にとってユダヤ人が内部の敵，他者であるとすれば，ムーア人は地理的に隣接する外部の敵，他者であった。しかしイスラム世界が西欧に屈するのは19世紀であって，ルネッサンスまでは文化的にも軍事的にも西欧をはるかに凌ぐ先進国であった。7世紀以降イスラム世界は発展を続け、15，16世紀には強大な組織力と常備車を持つ常勝の大帝国として圧倒的な力を誇った。特に8-15世紀の800年間，イベリア半島においてイスラム教徒を中心にキリスト教徒，ユダヤ教徒が共存して繁栄し，輝かしい文化が築かれ，西欧にルネッサンスをもたらしたのである。

それは卑しいシャイロックに比べて，身分高く威厳のあるオセローという人物にも表われている。オセローはイアーゴーによって貶しめられたが，元来王族出身で騎士道精神を身につけた英雄でありロマンスの世界の人でもある。彼が滅びることに皆，愛惜の念と痛ましさを覚える悲劇の主人公である。イアーゴーは卑劣であるが近代的合理精神の持主であり，11世紀末にイベリア半島で団結してムーア人を排斥しようとしたキリスト教徒の熱烈な巡礼の地となっていたサンチアゴと同じ名前である。また，その頃，トレドのロドリーゴ司教らによって意図的に歪められたイスラム像が西欧に流されるが，同様に歪んだムーア像をオセローに押しつけて破滅させるのである。ブローデルによると，レコンキスタによって改宗したイスラム教徒は「モリスコ」と呼ばれ，「狂信的かつ冷酷」に疎外，差別されたという。

これまで，異民族を他者として差別し排除するプロセスを見てきたが，最後に，この迫害が行なわれる以前，多民族多宗教が共存して刺激し合い，創造的な国際文化が形成された中世のイベリア半島を見ていきたい。差異を強調して相手を異質なものに還元するのでなく，活発に交流し合って相互的に文化形成した歴史を採ることに，他者を抑圧し支配するオリエンタリズムを越える可能性があるからである。

周知のように，西欧文化の原型が生まれたのは12世紀ルネッサンスにおいてである。そしてこれは，イベリア半島でイスラム教徒を中心に三教徒が力を合わせて商業や文化活動を活発に行なって発展させた文化が西欧に流入した結果であることが指摘されている。トレドを中心に（他にシチリア，ヴェニスも）アラビア語で伝わった古代ギリシアの哲学，医学，法学などのラテン語の翻訳が行なわれた。アリストテレス，プラトン，ユークリッド，アルキメデス，プトレマイオス，ガレノスなどが紹介された。アリストテレスはキリスト教と結びつけられてスコラ哲学となり，新プラトン主義はイタリア・ルネッサンスを導く重要な思想となり，特に自然科学の分野では，後にガリレオ，ニュートン，コペルニクスらの科学革命の下地を作った。この研究から大学も生まれ，その影響は測り知れない。

西欧人の魂となる騎士道精神もこの時形成された。武勇（prowess）と礼節（courtesy）を身につけることを目的とし，名誉，忠誠，勇気が重んじられ，雅びな宮廷風恋愛を大きな特徴とした。11世紀スペインでは華麗な宮廷生活が発達していた。『エル・シド』に見られるように，イスラムの戦士の間で戦闘はロマンの香り高い複雑な礼儀を伴うものであった。道徳，倫理上の規則があり，武術も馬術も芸術になっていた。12世紀にエルサレムを十字軍から解放したサラディンは騎士道精神の体現者として大いに称揚されたという。そしてそこでは女性が高い地位を占め，高い教育を受けていた。アラビアでは古くから「愛のために死ぬのは甘美で高貴な

ことだ」とする愛の伝統があり，イブン・ダーウードは『花の書』で，純粋さを守り愛を持続させる内に耐える愛を説いている。これを受け継いだのが11世紀スペインのイブン・ハズムの『鳩の首飾り—愛と愛する人々に関する論攷』である。そこでは「愛は崇高で繊細であり，宗教でも法でも禁止されないもので，魂本来の高貴な要素における結合である」と定義され，イスラム的愛の諸相が美しい詩を散りばめながら展開されている。この愛はトルバドールによって西欧へ広められ，宮廷風恋愛となって騎士道の中核を形成することになる。それまでの野蛮な肉欲にすぎなかったものが洗練された高度に精妙な愛となり，「恋愛，この12世紀の発明」と言われるromantic loveとして後世に多大な影響を与えるのである。この愛の伝統はさらに13世紀にはイブヌル・アラビーという大神秘主義者によって哲学的形而上的に高められ，ダンテに影響を与えて古典主義やキリスト教と一体になり，イタリア・ルネッサンスの「清新体」に引き継がれていく。オセローはキリスト教徒のムーア人としてこの騎士道を具現し，デズデモーナは彼の武勇のロマンスに心惹かれ，2人は障害を越えて結ばれるのである。

このように，西欧文明の中核となる精神がこのイスラム教徒を中心とする三大宗教の共存社会から生まれたのである。この共存社会はどのようにして可能であったのだろうか。アラブ，イスラム文化の大きい特徴は多文化性である。彼らは商業の民であり、多様な民族と宗教をゆるやかに包み，異国の商人や旅人を歓迎する開かれた共存のシステムを発展させた。各地を征服し，広大な地域を支配下に収め東西貿易で栄えたが，その過程で多くの民族と協調し，ギリシア，ビザンツ，イラン，インド，中国文明の遺産を積極的に吸収し，さらに集大成して発展させた。大抵，征服者は被征服者の社会に根づき，両者の同化と融合が行なわれ，協力してイスラム文明を担うようになったのである。改宗を強要せず，商人や神秘主義者の活動を通して広まり，異教徒の存在も法によって保障し，それぞれの民族の特性に応じて社会に組み込んでいった。「中国人は技術，ギリシア人は哲学と文学，アラブ人は詩と宗教，ペルシア人は王権と政治，トルコ人は戦闘技術にすぐれている」と言うように，才能に応じて活用し，豊かな文明を開花させた。中世のイベリア半島でも，ユダヤ教徒もキリスト教徒も保護民（ズィンミー）として，人頭税を納めれば自治を認められ，信仰の自由も許され，商業や文化の活動に参加して大いなる繁栄を享受したのである。

このような歴史に，差別と迫害のオリエンタリズムを越える可能性が示唆されている。異文化を差別し排除して作られた近代西欧の原理によって紛争や破壊の絶えない今，このような開かれた寛容な柔らかい統一国家の原理を考えることが大事なのではなかろうか。

参　考　文　献

W. Shakespeare, *Othello* ed. by Norman Sanders, Cambridge U.P.

———, *The Merchant of Venice* ed. by J.R. Brown, Methuen.

Stephen Greenblatt, *Renaissance Self-Fashioning*, The University of Chicago, 1980.

Terry Eagleton, *William Shakespeare*, Basil Blackwell, 1986.

James Shapiro, *Shakespeare and the Jews*, Columbia University Press, 1996.

Virginia Mason Vaughan, *Othello : a Contextual History*, Cambridge University Press, 1994.

David C. McPherson, *Shakespeare, Jonson, and the Myth of Venice*, University of Delaware Press, 1990.

Edward W. Said, *Orientalism*, Vintage Books, 1994.

マックス・ディモント，平野和子・河合一充訳『ユダヤ人の歴史』ミルトス，1994.

E. フックス，羽田　功訳『ユダヤ人カリカチュア』柏書房，1993.

S. グリーンブラット，高田茂樹訳『ルネサンスの自己成型』みすず書房，1992.

ジクリト・フンケ『アラビア文化の遺産』みすず書房，1982.

F. ブローデル，岩崎　力訳『都市ヴェネツィア』岩波書店，1990.

———，神沢栄三訳『地中海世界』みすず書房，1990.

A. カペルラヌス，野島秀勝訳『宮廷風恋愛の技術』法政大学，1990.
ドニ・ド・ルージュモン，鈴木健郎・川村克己訳『愛について』平凡社，1993.
C.S. ルイス，玉泉八州男訳『愛とアレゴリー』筑摩叢書，1972.
J. ブーラン，I. フェッサール，小佐井伸二訳『愛と歌の中世』白水社，1989.
阿部謹也『中世の窓から』朝日新聞社，1993.
————,『ヨーロッパ中世の宇宙観』講談社，1991.
伊東俊太郎『12 世紀ルネッサンス—西欧世界へのアラビア文明の影響』岩波書店，1993.
小岸　昭『マラーノの系譜』みすず書房，1994.
佐藤唯行『英国ユダヤ人』講談社，1995.
大澤武男『ユダヤ人ゲットー』講談社，1996.
樺山紘一「近親憎悪としてのイスラムとユダヤ」，『ユダヤがイスラムを生んだ』光文社，1995.
佐藤次高・鈴木　董『都市の文明イスラーム』講談社，1993.
鈴木　董『オスマン帝国』講談社，1992.
宮崎正勝『イスラム・ネットワーク』講談社，1994.
陣内秀信『ヴェネツィア—水上の迷宮都市』講談社，1992.
岩井克人『「ヴェニスの商人」の資本論』筑摩書房，1984.
姜　尚中『オリエンタリズムの彼方へ』岩波書店，1996.
川勝平太編『海から見た歴史—ブローデル「地中海」を読む』藤原書店，1996.
『現代思想—回帰する地中海』1995.6，青土社.
『大航海—オリエンタリズム再考』1996, No. 11，新書館.